

〈書評〉

根井雅弘

『企業家精神とは何か—シュンペーターを超えて』

(平凡社新書, 2016年11月15日)

塚 本 恭 章

Tsukamoto, Yasuaki

日本経済と世界経済のゆくえの確かな道筋が見えにくく、混迷の深まりが顕著になってきている。だからこそ、こうした昨今の現代社会における閉塞状況を果敢に打ち破る「人間＝ヒトの営み」がいつにも増して重要になってきていることに多くの異論はないであろう。概念的におそらくは広く一般読者にも通じうる「企業家」の機能や彼（女）が持ち合わせる資質・能力や性向としての「企業家精神」の発揮はそのための欠かせない要因の一つに違いない。企業も組織も人間が生み出した産物だが、それはときに人間の思惑を超えて機能し続ける。われわれの直面する「困難」はそこにもあるが、経済社会の活力を生み出す源はやはり「ヒトの力」ではないか。

主流派の新古典派経済学に限らず、伝統的に経済学においては「消費者」「生産者」「労働者」そして「資本家」など、複数の経済主体の個別意思決定の相互作用が「市場」を通じてどのように調整されるかを主要な考察対象としてきたが、それら経済主体に「精神」を付すことはない（消費者と生産者のあとに「主権」を付すことは周知の事実である）。その意味でも「企業家」とは上記とは別個に扱われるべき主体＝存在なのであろうか。そもそも「企業家精神」とはどのような内容を指示するものなのか。経済思想史の系譜における企業家像の「多様性」論を尊重し、「ヒト」たる「企業家」について

著者独自の観点を盛り込み平易に解説した作品が当該新書である。わたしはこれまで著者の作品を何度か評する機会を得てきたが¹⁾、本書「エピローグ」はあらためて学者人生をめぐる氏の問題関心の変遷＝履歴が語られており、なかなか印象深い。コンパクトな新書ながら含みは多岐に及んでいる。

著者の根井雅弘氏において当該テーマは「長い間あたためてきたもの」(192頁・196頁；以下とくに断りがない限り本書頁数)らしく、これまで現代経済学史について数多くの作品を世に問うてきた氏自身にとっても感慨深いものであるようだ。周知のように、「経世/経国済民」の学である社会科学としての(政治)経済学が「クニ」や「ヒト」を考察対象に置き(むろんこれ以外にも、「モノ・サービス(財, 商品)」や「カネ(貨幣)」そして「トキ(時間)」も中心に扱われている)、それらの役割や相互関係を体系的に分析する学問として発達してきたことを想起するとき、本書の試みはいわば経済学の原点を問い直すという問題意識も反映されている。

いわゆる「企業家」論として圧倒的に知名度の高い「シュンペーターを超えて」という本書副題を「伏線」に通読していくと氏の学問的関心にとどまらず、広く現代経済思想史をめぐる新鮮な光景がみえてくるのではないだろうか。当該新書の「理解」には一定以上の予備知識が必要であり、本書で扱われる「おもな登場人物」についての簡潔な「巻末」紹介は読者諸氏にとって良き手引きとなるであろう(根井編[1997]もあわせて参照されたい。厳選された「名著」解説を通じた人物・学説紹介である)。

*

おそらくは経済学の偉人たちの相当数が「企業家(論)」について何らかの言及をしているはずであり、本書で概観される人物ないしは学派である

¹⁾ 根井雅弘氏の著作に対するわたしの最新の書評は、根井雅弘『経済を読む―ケネーからピケティまで』(日本経済評論社、2015年10月)であり、『経済論集』(愛知大学経済学会)第199・200号合併号(2016年2月発行、115-120頁)に掲載されている。その以外の根井氏や氏以外の著書への一般誌・専門誌をふくめた書評と書評論文などについての詳細は、本学HPにおけるわたしの教員研究業績(過去5年分)を参照していただきたい。

「シュンペーター」(第2章)、「ガルブレイス」(第3章)そして「ネオ・オーストリアン」(第4章)はそのごく一部に過ぎないことは著者も自覚している。第1章「企業家はどこへ行った？」は「企業家」論をめぐる全般的な経済学説史的なサーベイであり、氏は主流派経済学における浸透度に関係なく、「企業家」論への鋭い「真理」を洞察したという観点から、『『企業家』という視点から過去の偉大な経済学者の思想を整理する意義』(53頁)を説く。「学派」横断的に「企業家」論を扱うことが重要である。

そしてまた、スミスとリカードの古典派からマーシャルの新古典派、ケインズの経済学へと続く経済学の先進国イギリスよりフランスにおける「企業家」論に注目すべき貢献があることを指摘し、シュンペーターが「経済理論の大憲章」と高く評価したワルラス一般均衡理論における「企業家」像の受動的で消極的な役割しか担っていないその位置づけとは対照的に、ワルラス以前のセイ(ケインズが否定した、かの「セイ(販路)法則」で有名)やカンティヨンらの「企業家」論の先駆性が強調されている(24-32頁)。イノベーションをふくめ、生産における意思決定や資本調達、情報収集・危険負担など多様な諸機能を提起したセイと比べ、ワルラスの「企業家」論が「セイよりも後退している」(26頁)ことは、上述したように、「イギリスよりはフランスの経済学者の貢献が重要なだけにワルラスの『消極性』はかえって目立つように思われる」(同頁)。但しここでの氏による指摘の含みは、ワルラスの「企業家」論が以前のフランスでの貢献と対比して「後退している」ということよりも、むしろ結果的に「後退していた」ないしは「後退させられていた」ことにより、彼の一般均衡理論を経済学の基礎理論として受け入れたシュンペーターの「企業家」論が「抜きん出ている」評価を与えられうるということではないだろうか。ではわれわれはそのシュンペーターの「企業家」論をあらためてどう捉えることができるのか。

根井氏はこれまでシュンペーターについての著作を数多く発表してきており、師である伊東光晴氏との共著『シュンペーター―孤高の経済学者』(岩

波新書、1993年）はとくに有名である。シュンペーターは「私にとって最も愛着のある経済学者のひとりである」（194頁）という個人的な見解を述べているのも頷けるが、むしろそうした主観的側面を超えてシュンペーターの独自の貢献を正確に把握しなければならない。シュンペーターにとって、「企業家とは、イノベーションを遂行するために経済の舞台に登場し、そうでなくなった瞬間に舞台から消えるというものであった」（59頁）わけだが、より端的に言えば、「企業家」としての特異な能力をもつ少数の「ヒト（英雄）」が資本家＝銀行家によるファイナンス（カネ/銀行の信用創造）を得て「企業家精神」を発揮することで、「発明」とは異なる「革新（新結合・イノベーション）」という「コト」を遂行し、それに成功したときのみ「企業家利潤」なる「モノ」を獲得することができる（動態利潤説）。これはワルラス静学理論とは次元を異にする「企業家」の「革新」（ワルラス体系では不在だった、シュンペーター的には補佐役の「資本家」機能と結合している）にもとづく動学理論であり、革新と模倣のなかで循環し発展していく資本主義経済における景気循環を解明した理論体系として存立している。

ワルラスの静学の一般均衡理論において企業家は「利益もなければ損失も受けない」主体であり、それはいわば「無利潤論」にほかならない。資本主義が「真に革新的な仕事をする」（69頁）企業家機能にもとづくダイナミズムを内在する経済システムである以上、「利潤」がどのように生み出されるのかを理論的に解明することが決定的に重要である。シュンペーターの「目的」が資本主義の「純粋理論」を構築することにあつたと岩井克人氏は述べているが（岩井 [2015] 168頁）、これはファイナンス（金融）の担い手でありリスク負担者でもある「資本家」機能と概念的に峻別し、「イノベーション以外の役割を認めない」いわば「企業家機能の『純粋化』」（60頁）をシュンペーターが堅持していたという著者のシュンペーター理解と呼応する。「新結合」の内容にシュンペーターが掲げていた、「新商品」・「新生産方法」・「新市場」・「新供給源」そして「新組織」の創造の5つは、「（他との）差異」そ

のものを意識的に創造する主体的人間活動にもとづき、同じことだが、資本主義における「利潤」はこうした「差異」からしか生まれえない。晩年のシュンペーターが『資本主義・社会主義・民主主義』（1942年）でいう「創造的破壊」はこうした彼の一連の思想を鮮やかに示す概念である。

シュンペーターの『経済発展の理論』（1912年）が刊行された当時の産業資本主義の時代を経て、現在は岩井のいうポスト産業資本主義の時代に突入し、グローバル競争が激化していくなか、各企業・各資本は「差異」という名の「（企業家）利潤」をもとめてイノベーションを積極的に推進している。シュンペーターの「企業家」論・「革新」論とそれにもとづく「利潤」論は彼自身の時代よりもはるか先のポスト産業資本主義時代の経済理論として生き続けているといえよう。企業家に必要な能力としてシュンペーターが強調した、1) 本質を見抜く「洞察力」、2) 「意志」を新しい方向に働かせる力、そして3) 「社会環境の抵抗」を克服する力（69-73頁）は、やはり「企業家精神」のコアとして今なおきわめて高い現代的意義をもつに違いない。この側面では、第1章の最後で解説される、「不確実性」のなかで意思決定を担うケインズのいう企業家の「血気＝アニマル・スピリッツ」との親近性も興味深い（48-52頁）²⁾。「ヒト」に着眼した理論体系であることがシュンペーターにせよケインズにせよ、彼らの経済思想・理論が単なる「学説（史）」以上のものとして現代的に読み継がれ、読み直される大きな理由である。

＊

主流派の新古典派経済学への批判的視野からの「企業家」論が論じられていることが本書のもう1つの特色であり意義である。ケインズ経済学と新古

²⁾ ケインズの「アニマル・スピリッツ」の重要性についてあらためて論及している文献として依田 [2016] および伊藤 [2016] を参照（なお伊藤氏の著書には「週刊読書人」2016年10月21日号にてわたしは書評を発表している）。両者はアニマル・スピリッツとそれを展開したケインズ経済学の意義を、現代のファイナンス理論や行動経済学との関連においても捉え直しており示唆に富む。最近ではノーベル賞学者のジョージ・アカロフとロバート・シラーによる共著『アニマル・スピリット』（東洋経済新報社、2009年）が記憶に新しい。

典派ミクロ経済学（価格理論）との二本立てを基調とするその当時の主流派であるサムエルソン「新古典派総合」の時代に、制度派・異端派経済学者として活発な論議を展開したガルブレイス、ケインズ主義や社会主義・集産主義思想と真っ向から闘い続けたミーゼスやハイエクとその継承者のカーズナーらネオ・オーストリアン（現代オーストリア学派）自体がミクロ・マクロ経済学で扱われることは皆無であり、通常の経済学史や社会思想史などの講義でも登場することはあまりない。現在の経済学が置かれている状況を鑑みても、こうした学説の意義は常に再評価されてよい。ガルブレイス、ネオ・オーストリアンの順に彼らの「企業家」論をみていこう。

マーシャルが生産要因として「組織」をとりあげ、企業組織や企業関係を重視した彼の着想が故・青木昌彦氏をその開拓者の一人とする現代の「比較制度分析」に連なっているのと同様に、大企業にもとづく「計画化体制」の影響力を強調したガルブレイスの「新しい産業国家」論が主流派経済学における内部組織・産業組織論、あるいはノーベル賞学者のロナルド・コースからオリバー・ウィリアムソンの新制度派経済学を進展させる「契機」を与えたことはガルブレイスの一連の著作の学説史的意義である。批判が批判にとどまらず主流派の枠内であるとはいえ、その「拡張」や「刷新」をもたらしたからだ。氏はガルブレイスの学問的貢献の本質をかつての作品で「制度的真実への挑戦」と称していたが（根井 [1995]）、新古典派がその理論前提に置く「通念」としての「消費者主権」への率直な批判的見識からもガルブレイスの経済学研究におけるスタンスが明確に汲み取れる。

現在の多くのミクロ経済学の「教科書」はワルラスを始祖とする一般均衡理論が描く完全競争モデルにもとづく価格理論の解説から始まり、そこでの企業は資本と労働の投入物から財・サービスなどの産出物を生み出す「生産関数」として扱われている。市場均衡にのみ焦点化した理論ではその状態を破壊し「革新」を担うシュンペーター的な「企業家」論は欠如している。そうした支配的な学界状況に対するガルブレイスの狙いは、「いまだに完全競

争モデルに支配されている主流派経済学の現実離れした姿に社会の耳目を向けることにあった」(107頁)。伊東光晴氏も「企業は組織をもたない、いわば点のようなものである」(伊東[2016] 140頁) 主流派の企業像に修正を迫った『新しい産業国家』の特徴を明確化している。ガルブレイス自身が『『無視される』よりは『批判の対象になる』ことを最優先して」(195頁) 著書を世に問うているという根井氏の理解もおおかた納得がいく。

ただし法人大企業内部の専門家集団であるいわゆる「テクノストラクチュア」による実質的影響力と企業掌握力を現代資本主義論のコアとして打ち出したガルブレイスによる当時の現状分析は、彼の「新しい産業国家」から伊東氏のいう「新しい金融国家」への変貌に伴ってその位置づけがあらためて再考されなければならないと総括されている(114-118頁)。日本の経営システムの優位性が説かれた1980年代と違って株主重視のコーポレート・ガバナンスと株主資本主義の機能性が重視され、「制度」をめぐる歴史的転回が生じてきていることがその背景にあるが、新自由主義的グローバリゼーションが加速するなかでいかなる「企業」体制が適しているのかという問題に対する普遍的回答なるものはおそらくないであろう。『ゆたかな社会』『新しい産業国家』に続く第3部作目の『経済学と公共目的』で展開されているガルブレイスの「公共国家」論や「新しい社会主義」論の可能性とあわせて(伊東[2016])、主流派経済学批判を意識的に推し進めたガルブレイスを読み直す試みは今後も継続されるべきである。20世紀の「資本主義対社会主義」というイデオロギー上の対決が21世紀においては新自由主義的グローバリズムと反新自由主義的グローバリズムの対決としてむしろ事態を深める帰結をもたらしてきている以上、それはまた、「通念」への果断な批判精神を発揮したガルブレイス論の再評価に寄与することにもなるであろう。

＊

そのような「企業家」像としてのガルブレイスによる「テクノストラクチュア」論と比べ、評者のわたしにとってより強い知的関心を促してくれるのは

ハイエクらネオ・オーストリアンの貢献である。

社会主義社会の理論的・実地的存立可能性をめぐる社会主義可能派のオスカー・ランゲらとの有名な社会主義経済計算論争が重要な教訓場となり、合理的経済計算の可能性を支持するランゲの社会主義論を批判するなかで、彼らがその根拠として援用していた新古典派一般均衡理論をも問題視し、現代オーストリア学派は主流派経済学に代替しうる市場理論（彼らの表現では「市場プロセス論」）の発展に尽力してきた（Lavoie [1985]；西部 [1996]；Kirzner [2006]）。社会主義や干渉主義，ケインズ主義への徹底した批判者であった「ミーゼスとハイエクの凄さは、長年、みずからの経済哲学への逆風が吹き続けたにもかかわらず、決して信念を曲げなかったことである」（145頁）という評価には完全に同意できる。主流派経済学批判とそれにもとづく独自の「企業家」論は、古典的自由主義の堅持という彼らの経済思想史的貢献とは異なる経済理論上の成果である。ここではミーゼスを師とするカーズナーの「企業家」論の意義を中心に本書の内容を整理しておきたい。

すなわちカーズナーの「企業家」機能は、イノベーションを遂行することで市場均衡を「破壊」して「動態」を始動させるのではなく、現代オーストリア学派の共有する「市場プロセス」論を引き継ぎ、以前の「市場の無知」や「誤った意思決定」などの「諸機会に対して機敏である」企業家が、「不均衡の状態において『均衡をもたらす変化』を担う独自の役割を演じる」（125頁）というものである。より端的に言えば、「均衡破壊者」としてのシュンペーター的「企業家」像に対し、市場の不均衡状態における「均衡回復者」ないしは「均衡化傾向をもつ矯正プロセス」（132頁）の発動者としてのカーズナー的「企業家」像という、登場する局面や機能・役割面において鋭く対照的な「企業家」論が存立しているわけである。カーズナーの指摘する「機敏さ」とは、「察知する力」や「気づく能力」としての企業家精神であり、彼においてはロビンスズの「経済人モデル」における経済諸主体の機械的な合理的選択行動とはまったく違い、「意思決定者が市場における経験から学んでいく可能性」（127

頁)が重要視されている。総じていえば、企業家的な市場プロセスは絶えざる動態的なプロセス(価格競争と非価格競争をふくむ)にほかならない。このようなカーズナーの「企業家」論が、企業家自身の「予想(期待)」能力やその「投機家」的性格、「未来の不確実性」への対処などを詳述していた師・ミーゼスの一連の「企業家」論を踏襲していることはあきらかなところである。そしてまた、ミーゼスとカーズナーはこうした企業家的プロセスが絶えず進行している限り、「消費者主権」が貫徹しているとみなしていたが、動態におけるイノベーション機能を「純粋化」したシュンペーターにおいては、「消費者ではなくむしろ企業家が主導権を握る」(136頁)のであり、ここでも両者の「企業家」論は鋭く対峙している。

ところで氏による、「一般均衡分析への批判とつながっていることを見逃してはならない」(144頁)ものとして強調されているハイエクの「プロセスとしての競争」論(1946年)と「社会における知識の利用」論(1945年)の意義は、ネオ・オーストリアンの「企業家」論にとどまらず、現在の主流派経済学との関連でより理論的に明確化される必要がある。なぜならば、ハイエクの「完全競争」モデル批判は完全知識(完全情報)から不完全情報や情報の非対称性にもとづく市場(の失敗)論に活かされており、また氏が「ユニークな知識論」と称するハイエクの知識論は、希少な資源配分メカニズム＝情報・知識伝達メカニズムとしての市場理論として主流派経済学の枠内に包摂されている可能性があるからである³⁾。ハイエクの説く「競争の意味」

³⁾たとえば日本人経済学者の執筆したミクロ経済学「教科書」として多くの読者を獲得している神取道宏[2014]をみてみよう。そこでは、スミスの「見えざる手」にもとづく市場メカニズムの特長は、ハイエクの1945年論文「社会における知識の利用」を通じて以下の2点に理論的に整理されるとし、主流派の新古典派経済学的パースペクティブからのハイエク解釈が提示されているからである。その2つの特長とは、「市場価格は各人が分散して持っている情報を効率よく集約して伝達する」というく市場メカニズムの情報効率性>を備えていること、そしてまた、「市場においては、人々は終始利己的に行動しているにもかかわらず、結果として社会的に望ましい(効率的な)結果が実現する」というく市場メカニズムの誘因整合性>である(同上書、254頁)。それらはハイエク自身による市場

論やのちの「発見的手続きとしての競争」論において、競争は「未知なるものの探索の旅」にほかならず、ハイエクの含意する「発見」はシュンペーター的な「創造」と内容的にも親近性を有している。現場の知識をふくむ「既存の知識」の利用に限らず、「未知の知識」や「暗黙的な知識」の試行錯誤的発見が絶えず生じうる動態的競争プロセスとしての市場像は主流派の「均衡」理論からは捨象されている。単なる「均衡化」論を説くだけではその論理的帰結は主流派経済学との両立可能性を示すにとどまる。

したがって、ネオ・オーストリアンによる新古典派経済学批判という「挑戦」(第4章のタイトルに使用されている)がどこまで理論的・思想的に「成功」しているのか、またこれからの「学派としての可能性」についても、本書での論述をふくめより内在的に探究されなければならないであろう。これまでの氏の著書におけるハイエク論と同様に、本書でもこうした論点への明確な論述はあまりなされていない。カーズナーによる精力的な啓蒙活動の影響によって、ミーゼスへの関心も高まってきたと明言するならばなおさらである(122頁)。ネオ・オーストリアンによる「反トラスト法批判」の現在における経済政策論的意義についても同様であろう。ネオ・オーストリア学派を知らない経済学部生や一般読者とは異なる専門的研究者にとっては、そうしたことにこそ大きな学問的重要性を見出すはずだからである。

＊

これまでの論述内容をもとに最後に「要望」を1点。それは、氏の研究者人生の当初からの学問的関心である「企業家」や「企業家精神」についての本書における省察が、経済主体の最適化条件にもとづく「計算機械」のような「企業」論(制度と組織の経済学をめぐる理論的進展、青木昌彦氏をその

メカニズムの機能的特性の重要なポイントであるにせよ、「競争の意味」(1946年)で展開されている上記以外の側面には言及されていない。このような主流派経済学的なハイエク解釈は奥野・鈴木[1985]やStiglitz[1994]にもみられる。たとえばStiglitz[1994]におけるオーストリア学派解釈に対する批判的応答はKirzner[1997]とBoettke[2002]をみられたい。

開拓者の一人とする進化ゲーム理論を援用した比較制度分析は「拡張」新古典派の一翼を担い広く知られているが）に対し、いかなる修正や変更を迫るものとなるのか、その理論的な含みについてである。現代経済学にとって多様な「企業家」論をどう活かしようのかといってもよい。

シュンペーター的な「創造型」企業家とカーズナー的な「受動型」企業家という企業家の二類型（こうした区分が適切か否かという指摘もあろう）とそれら二類型の橋渡しが可能であり重要であるという今後の当該研究分野への示唆だけでは物足りない。シュンペーターはワルラスの静学的一般均衡理論を経済学の基礎理論として採用し、そのうえに動学理論としての企業家によるイノベーション理論を構築したが、ネオ・オーストリア学派はハイエクの「競争の意味」論文にもあるように、新古典派の静学的一般均衡理論自体への批判を積極的に展開してきている。社会科学としての「経済学の基礎理論」の受容において両者が顕著に異なっていることをふまえ、今日的に「企業家」論を扱うことの理論的インパクトを今後もより深く問い直すことが必要である。著者の「企業家の二類型」論に関連して、西部忠氏は社会主義経済計算論争の系譜学的省察をおこなうなかで、ランゲ的な「環境適応」型競争（新古典派）とハイエクの「環境創出」型競争（オーストリア学派）を抽出し、後者こそ資本主義システムの社会主義システムに対する相対的強さの源泉であることを、「ストックとしての貨幣」機能との統合的理解から推進させており、こうした試みはぜひ参照されてよい（西部 [1996] [1998]）。経済学の基礎理論のコアに該当するのが「市場の理論」ならば、その刷新作業における「企業家」論の位置づけが問われている。

そしてまた「企業家精神」の豊富な内容とあわせ、企業家精神を発揮しようとするヒトとそうでないヒトではなにが決定的に異なるのであろうか。なにが企業家精神の発揮を許容しようする要因なのであろうか⁴⁾。すべてのヒトが「企業

⁴⁾ いくぶん本書の意図と文脈からは逸れるが、ハンガリーの世界的経済学者であるコルナイは、革新的「企業家精神の発揮」という側面を資本主義システムと社会主義システムと

家精神」を発揮して「企業家」機能を遂行することはありえない。これは実証的分析をも要する総合的な「企業家」論研究に発展していくものだが、知的関心を喚起しうる奥深いテーマだと考えられる。「企業家や企業者と名の付く内外の学術論文にはほとんど目を通していた」（191頁）著者であるならば、それ相応の貢献が可能ではないだろうか。

おそらくはこうした「要望」が提起されうるのは、著者自身も想定していたのではなかろうか。なぜならばそれは、本書副題の「シュンペーターを超えて」に込められている理論的な含みにほかならないからである。「ワルラスさえ解けなかった動態の世界に踏み込み、経済発展のモデル化に成功した経済理論家となった」（194頁）シュンペーターの「手さばきは誠に見事というほかない」（193頁）という氏によるシュンペーターへのすこぶる高い評価は、「シュンペーターを超えて」いこうとすることにある種のためらいの念すら氏もっているのではないかと感じてしまうほどだ。

かつて岩井克人氏はシュンペーターを「遅れてきたマルクス」と称し、「遅れてきた」からこそかのマルクスを超える理論的貢献をシュンペーターは成し遂げることができたと説得的に論じていた（岩井 [1985] [2015]）。それはマルクスを換骨奪胎しえたことによるシュンペーター経済動学の現代的意義を鮮やかに描き出している。これからの時代にいわば「遅れてきたシュンペーター」は果たして登場しうるのだろうか。シュンペーターの名著『経済発展の理論』が刊行されて100年以上経ち、時代の混迷の深さと世界情勢不安が増してきているグローバル資本主義社会において、「企業家」の役割への期待は今後さらに高まっていくと考えられる。とくに日本では少子高齢化の進行が加速しており、そうした現実を踏まえたうえでのイノベーションや成長

の比較考察からあらためて論じ直し、後者のシステムの最大の欠点をその欠如に起因すると結論づけている（コルナイ [2016]）。「企業家」機能とそれを生み出す「企業家精神」の問題は比較経済システム論においても再考を要するものであり、コルナイの結論自体はハイエクら現代オーストリア学派の洞察と重なり合うが、資本主義システムとその作動様式を主流派経済学批判にもとづいて長年探究してきたコルナイ学説は含蓄に富んでいる。

戦略の実効力が問われているからである。本書は多様な「企業家」論と「企業家精神」の内容について、その学説史的意義をふくめ広く考え直すための一著であり、経済学部生はじめ多くの学生諸君に一読を推奨するとともに、当該新書のより本格的な続編を著者にはぜひ期待したい。

参考文献

- 依田高典 [2016] 『「ココロ」の経済学—行動経済学から読み解く人間のふしぎ』ちくま新書。
- 伊藤宣広 [2016] 『投機は経済を安定させるか？—ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』を読み直す』現代書館。
- 伊東光晴 [2016] 『ガルブレイス—アメリカ資本主義との格闘』岩波新書。
- 岩井克人 [1985] 『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房。
- 岩井克人 [2015] 『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社。
- 奥野正寛・鈴木興太郎 [1985] 『ミクロ経済学Ⅰ』岩波書店。
- 神取道宏 [2014] 『ミクロ経済学の力』日本評論社。
- 塚本恭章 [2016] 「時代史のなかのケインズ経済学—「投機」をめぐる問題への幅広い省察（伊藤宣広『投機は経済を安定させるのか？』の書評）」『週刊読書人』2016年10月21日号4面，第3161号。
- 西部忠 [1996] 『市場像の系譜学—「経済計算論争」をめぐるヴィジョン』東洋経済新報社。
- 西部忠 [1998] 「資本主義経済の強さとは何か？—所有権・インセンティブ・技術革新」『比較経済体制研究』（比較経済体制研究会）第5号，3-20頁。
- 根井雅弘 [1995] 『ガルブレイス—制度的真実への挑戦』丸善ライブラリー。
- 根井雅弘編 [1997] 『経済学88物語』新書館。
- コルナイ [2016] 『資本主義の本質について—イノベーションと余剰経済』（溝端佐登史・堀林巧・林裕明・里上三保子訳，NTT出版）。
- Boettke, P. [2002] “Information and Knowledge: Austrian Economics in Search of its Uniqueness”, *The Review of Austrian Economics*, No.15, Vol.4, pp.263-274.
- Kirzner, I.M. [1997] “Entrepreneurial Discovery and the Competitive Market Process: An Austrian Approach”, *Journal of Economic Literature*, Vol. XXXV (March), pp.60-85.

- Kirzner, I. [2006] “Calculation, Competition and Entrepreneurship” in *Humane Economics: Essays in Honor of Don Lavoie* edited by Jack High, Edward Elgar, pp.29-46.
- Lavoie, D. [1985] *Rivalry and central planning: The socialist calculation debate reconsidered*, Cambridge Mass: Cambridge University Press. (吉田靖彦訳『社会主義経済計算論争再考—対抗と集権的計画編成—』青山社, 1999年)。
- Stiglitz, J.E. [1994] *Whither Socialism ?* , MIT Press.